

◎座談会◎

2000年の大学・学問・社会

——「将来構想」の再構想への課題——



香山健一（学習院大学教授）

御前進（龍谷大学教授）

古木宜志子（津田塾大学教授）

司会／内田満（早稲田大学教授）

——敬称略・大学名ABC順——

内田 今日とは二十一世紀へ向けての大学の問題についてお話し合いいただこうというところでお集まり願いました。

ここ数年来、世界的に世紀的な大変化が起こっております。また国内で大学を囲む条件の変化も激しく、予想されております学生人口の急激な減少をも視野に入れながら、教育や教員のあり方についての問い直しも進められています。その中で多くの大学では、「将来構想」が文書にして提出されています。そういった問題を整理しながら、時流に倅さすのではなく、原点を確認し、将来を見据えた議論をしてみたいと思います。

「二〇〇〇年の大学・学問・社会」というタイトルになっておりますが、二十一世紀に入るまでに我々の責任の中で、どういうことをなすべきか、何を考えるべきかを確認する、いいかえまして、大学の「現実と夢」の間の諸問題を考えてみたいと思います。

二十一世紀の世界と大学

内田 最初に、二十一世紀の世界と大学について、どんなイメージをおもちかお伺いしたいと思います。御前先生いかがですか。

●二十一世紀に四つの問題がある

御前 二十一世紀中に人類、あるいは世界が解決しなければならないだろうという問題が、四つあると思います。

第一に環境問題。これについては説明を要しないと思います。

第二は、体制ないしは生産関係の問題です。ソ連型計画経済、いわゆる二十世紀社会主義が破綻したことをもって、市場経済の勝利と喧伝する向きもありますが、ひるがえって市場経済を顧みてみますと、これまでの資本主義の歴史は市場の暴力を人為的・計画的にどうやっておさえこむかを追求してきた歴史であつたと思います。市場原理が貫徹するままに任せておくと、極端な富の集中や恐慌、さらには帝国主義戦争をまで引き起こし、純然たる資本主義体制ではやっていけなかったという歴史です。いままた、環境問題や民族問題、それに世紀末的な退廃現象の深刻化という形で、市場経済の限界性が突きつけられています。二十世紀型社会主義がダメだということです。それでは市場経済を原理とする資本主義体制制というわけにはいくまいという問題です。

第三にあげたいのは、民族ないし人種問題

です。最近、国際化ということが盛んに言われていますが、いま重要になってきているのは、国と国との関係ではなくて、国民相互、民族と民族、人種間でどうつき合い、協力していくかという問題です。国際というより、民際、民族際、人種際ですね。生活慣習や宗教の違いを乗り越えてということだけでなく、資源や生産物の分配問題をも含めて、世界的規模で社会生活をうまくやっていく方法をみつけないければなりません。

最後に、国際秩序の維持システムをどうするかです。冷戦構造と呼ばれてきたもの、またそれ以前のシステムに替えて、上記三つの課題を解決しつつ人類が共存していくのになさわしい国際秩序をどのように構築し、維持していくかという問題です。

現在の推移をみながら、本当にこれらの課題が解決されるのかと考えると、ペシミスタックな気分にならざるをえない面もありますが、少なくとも解決の見込みが立たないことには二十一世紀における人類の安泰を展望できないのではないでしようか。

内田 香山先生はどのようにお考えですか。

●重要なことが三つある

香山 私は学校法人の代表としてではなく、研究者・教育者としての立場から、大学に焦点を合わせて自由に意見を申し上げたいと思います。二十一世紀の世界・社会・大学というものを考えるときに、最低三つ重要なことがあると思います。

第一は、御前先生も言われたことですが、地球が急速に小さくなくなってきたために生じてきた変化だと思っています。我々がこれから教育しようと思っている世代は、ますます小さくなる地球の上で活躍してもらわなければいけないと思います。

学習院大学は新渡戸稲造先生が一八八四年に留学されました、ジョンズ・ホプキンス大学と提携校の関係を結んでいます。新渡戸さんはちょうどいまから一〇八年前に留学されて、『武士道』という本をお書きになり、日本の文化を紹介するという仕事の先駆者となりました。同時代のクラスメートにはウィルソン大統領がいらっしゃいますが、「我願わくば太平洋の架け橋とならん」という言葉を残されたわけです。

ボルティモアのジョンズ・ホプキンス大学

みさき すずむ氏



へまいました際にも触れたことですが、時差があり、しかも直行便が飛ぶようになりましたから、いまや成田を出発した日時と大差のない時間に向こうへ着けるようになりました。つまり太平洋は、もはや新渡戸さんが考えておられたような大洋ではなく、むしろ小さな湖か池のようなものになってきたのではないから。そうなるてまいますと、いままであちらこちらにあった壁が邪魔をしてくると思っています。その壁はベルリンの壁だけではなくて、いろいろなものがあると思いますが、その異文化間の障壁を取り除くことが必要になってくる。

第二に、そうなりますと、次の時代の靑少

こうやま けんいち氏



年に活躍してもらうには我々が可能な限り、二十一世紀の時代の問題を予見しながら、それに必要な資質を準備しなければいけないということになるだろうと思います。そこでいままで以上に異文化間のコミュニケーション能力をもった人材を育てなければいけないということが、出てくるだろうと思うのです。大学がやはり文化センターとなって、様々な文化を横につなぎ、縦の蓄積をして、いままどと違った重要な役割を果たさなければならぬと思っています。

第三に、大学がこれから挑戦すべき課題は、従来の理論・知識・情報のストック、あるいは学問体系では対応できないような未知の新

しい問題だということです。大学は過去のス
トックを大事にすると同時に、想像力と創造
力の二つを大切にしなければならぬ時代に入
っているのではないかと思います。その意
味ではさっき言われたような、政治システム
・経済システム、国際関係・環境・生態系・
生命とか、自然科学・人文科学・社会科学の
全分野にわたって、相当のルネッサンスとい
いますか、あるいはリフォーメーションが必
要になってきていますが、残念ながら日本の
大学改革のテンポは、変化に追いついてい
ないと思います。どうやってわずか八年か九年
の間に、時代の要請に合わせられる国際競争
力のある大学にするか、日本の私学の重要な
課題ではないでしょうか。

内田 いま、香山先生がいわれましたのは、
地球が小さくなって、ますます異文化間のコ
ミュニケーションが重要になってくるという
ことです。この問題に一番先駆的に取り組
んでこられたのが津田塾だと思いますが、古
木先生いかがでしょうか。

●来し方を振り返る必要もある

古木 先生方のおっしゃったことに共通の

国際化とか、地球が小さくなったとかいう点については全く同感で、二十一世紀にはさらに世界との接触が繁く、深くなっていくことを想定して大学の役割も考えるべきでしょう。

西暦二〇〇〇年に津田塾はちょうど創立百周年を迎えますので、今は将来構想をいろいろ練っているところですが、こういう節目には来し方を改めて振り返る必要もあると思います。

一八八二年、津田梅子は十八歳になる直前に帰国していますが、十一年間アメリカで育ったため、一〇〇年ぐらゐ前の世界にタイムスリップしたようなショックを受けたようです。



ふるき よしこ氏

私はアメリカの大学院に二年と、その後ケンブリッジ大学に二度、二年半滞在しましたが、アメリカやイギリスの大学から帰ってきた、日本の大学を見るたびに、似たようなタイムスリップを経験するんです。日本の大学が果たしてきた役割を考えると、です。大雑把な言い方をしますと、日本の大学が誇れるのは非常に高い水準のワークフォースをつけたということぐらゐではないかと思うのです。

言い換えれば、よきリーダーをつくったかという、それは非常に少ないと思いますし、よきシチズンを育てているかどうかというの、大変疑問です。比較していくと、アメリカの



うちだ みつる氏

大学のはうが、よきシチズンをたくさん育てているという気がします。大学教育を受けた人の社会奉仕、環境についての意識、異人種への寛容度、政治に対する発言などにそのことが窺えると思います。

それからイギリスでは大学に行く人が日米に比べ、非常に少ないわけですが、いろいろな分野でよきリーダーをつくっているように思います。優秀な人材が大学に留まる率が高いのもその一例で、大学人として羨ましく感じる点です。一方、エリート養成に重きを置いてきたことに対する反省もあり、四十以上のポリテクニカル・カレッジを大学に昇格させようという動きがあります。二十一世紀の夢を語ろうというときに、少し水を差すようですが、日本の大学が、いつまでもワークフォースを誇るような大学であっていいのか、とまず反省させられます。

異文化のコミュニケーションに関して申しますと、「一番先駆的に取り組んできた」といわれると面映いのですが、津田塾は創立の背景そのものにこの課題があったといえます。その後の展開は、いわばこの課題に沿って時代に対応してきたものとみていいでしょう。

たとえば、英文学科でも、文学・語学に留まらず、一九六三年にアメリカ研究、六八年に国際関係といった専攻を設けました(後者は、翌六九年、学科として独立)。こうした試みの最近の例としては、英文学科の中にコースとしてコミュニケーションを設け、その中で日本語教員の養成も始めたことです。世間一般に文化の「入超」が反省されてきたという時勢もありますが、英語教育の長い歴史のなかで培われたディシプリンを日本語教育に生かせる、という積極的な理由もあります。つまり、コミュニケーションを両方から歩み寄る形にすることに、いくらかでも貢献できないかということです。

一方、忘れてならないことは、英語の教育学習の歴史がおよそ一世紀半になりますが、成果からみますと、まだ満足できる状態にはほど遠いことです。ちょっと前の話になりますが、イギリスの『ガーディアン』紙にこんな記事が載っていました。日本の大学には七〇〇人以上も英語の教師がいる。にもかかわらず日本人の英語は、大変お粗末な状態だということです。これは日本の大学に勤めているイギリス人が書いたものでしたが、確かに

英語や英文学を専攻している人口を考えますと、能動的にコミュニケーションできる日本人は大変少なく、私も現状には悲観的です。こうした卑近な例をとってみても、残念ながら日本の大学が十分に機能を果たしてきたとはいえないですね。

いま日本の大学は 次の段階に進むべきときにある

内田 十五、六年前になりますが、フィリピンのマニラにあります、ドウ・ラサルという大学で教えているときに、近くのある大学を訪ねて、大変親近感を感じたことがあります。大規模な大衆的な大学で、たくさんの学生がいたからです。香山先生と古木先生がおっしゃいましたように、確かに日本の大学が研究・教育の水準や物的条件の総合的ありようからみて、アメリカやイギリスの大学に比べて遅れていることは否定できません。しかし、ある意味では、それは二十世紀の日本の大学が通るべきプロセスだったのではないかと思うのです。あるレベルまでかなり広い層を引き上げることが日本の大学のいままでの役割だったのではないかという気が

します。二十一世紀に向け、外的な条件では、学生数が減ってきます。そういうことと同時に、ここまでレベルを引き上げてきましたので、いまは次の問題を考えなければいけない段階ではないのかと思います。

早稲田がよく批判されますのは、大教室に学生を集めて行う講義があるということですが、しかし学生数を各大学が減らしてしまつたら、日本全体のレベルは停滞してしまふ。ですから、ある程度は、やむを得ない条件でもあったんですね。それをあまりマイナスに評価してしまつと、次の段階が出てこないのではないかと。私はアメリカで、学生数が一五〇〇人程度の大学で教員と学生がお互いみんな顔見知りでファーストネームで呼び合える大学と、大規模なロサンゼルスのカリフォルニア大学の両方の大学での講義を経験しましたが、アメリカでもいろいろな組み合わせられているのです。アメリカも大衆的な教育をせざるを得なかった側面もある。ですから、すべてを是認するという意味ではありませんが、必要な側面もあったのではないかと。古木先生が津田梅子が帰られたのは一八八二年とおっしゃいましたが、それは、早稲田ができた年です。早

稲田も一一〇年を経過し、当時の建学の先達の志を踏まえながら、次の段階へ進むべきときがきている、という思いが強くなりました。

先ほど来のお話で、一つは世界との関係ですが、同時に考えなければならぬのはいうまでもなく、国内での役割です。香山先生は、異文化間のコミュニケーションという、今まで経験しなかった問題に直面すると言われました。他方で、国内的には、二十一世紀になると、日本は世界の最高齢国になります。これは人類史上日本人が初めて経験することです。高齢化問題は避けて通れない問題で、二十一世紀に入る前にそういう問題について学生にいろいろな経験、勉強をさせる必要があるという気がします。御前先生は、環境という問題をおっしゃいましたけれど、話を少し展開していただけませんか。

人類的課題の認識を土台に

御前 二十世紀における文明形成の根拠となった価値は、自我・個人の解放ということであったといっていると思います。今日の環境問題は、飢えとか物欲という面で自我を解放しようとした足掻きの結果だといえます。

個人主義・自由主義か、社会主義かというような体制づくりも、支配・被支配、搾取・被搾取のような人と人の関係という面から個人の解放を追究する足掻きであった。

このような視点から二十世紀を振り返ってみますと、二十世紀文明は、人間中心主義を基本にもつ西洋型の発想に基づいたものであったといえるでしょう。ところが東洋には、これとは根本的に異なる発想がある。たとえば仏教は、「和」を基本において発想しますが、これは自然に対して人間を、他者に対して自己を、原点においてする発想とは原理的に異なります。「和」を追究すれば自我を抑制しなければならなくなる。そこで、「無私」が価値をもち、自我追究は「我執」にとらわれた足掻きだということになります。

ところで、先に二十一世紀の課題として四つ問題をあげましたが、それは実は、こうした人類的課題を認識することが、大学の社会的役割とか存在意義とかを云々する際の土台でなければならない、ということを書いたかっただけです。この課題を前にして、では大学が一体どのような役割を果たしているのか、果たすべきかと自問するとき、我田引水的に

なりますが、一つの帰結として、二十世紀文明の落とし子であるとも言えるこれらの課題を解決するには、西洋的な価値観を問い直しながら判断し、実践できる人間を育成しなければならない、という大学にとっての課題が浮かび出てきます。

昨年、大学設置基準が大綱化されて、各大学で教育理念を定めて特色化をはかれましたことになったとき、龍谷大学では、この課題の追究こそ仏教系大学の使命だということとして、「人間・科学・宗教」をスローガンとする教育理念を定め、建学の精神をそういう形で現代に展開していこうということになりました。こうした面での研究・教育で一定の役割を果たすことができれば、西洋中心に展開してきた世界のなかで経済大国化した唯一の東洋の国、日本の国際的貢献にも連動すると思っています。

内田 最近医学のほうで、東洋医学と西洋医学の融合の試みがありますね。いまのお話の仏教的な考え方を西洋の考え方と結びつけることもその方向での一つの課題でしょうか。そういう問題について、香山先生はどうお考えになりますか。

発信能力を重視した研究・教育

香山 異文化間のコミュニケーションが非常に重要になるということを申し上げましたが、その中身は非常に多種多様で、日本文化の伝統についての認識、それについての説明能力、発信能力も要求されると思うのです。それを比較して、異質なものを理解できる能力がなければ、異文化間コミュニケーションはできないと思います。そういう点では文字どおり、二十世紀末の世界の大学も日本の大学も、転換期を迎えていると思います。明治以来の日本の大学は、基本的には当時の先進国であった西洋文明の輸入と受信に主たるエネルギーを投入してきたと思います。

私学を先頭に日本の大学が転換しなければいけないのは、従来の外来文化の輸入摂取はもろろん続けていかなければならないことですが、しかし、結果的に教師も外来文化の輸入業者になりがちですし、学生に対しては画一的に対応してしまい、学生を受信専門に追いやつて、発信させない。ですからディベーター能力がない、発信能力がない。日本人同士であっても、異文化理解力をもった人間とそ

うてない排他的な人間の間に、激しい文化摩擦が起こりますが、これは、過渡期には避けられない摩擦だと思っています。

そういう点でいいますと、受信専門の研究・教育から、かなり発信能力を重視した研究・教育に転換しなければいけないでしょう。また内田先生がおっしゃったように、明らかに高等教育の量的拡大というのは、日本がサミットの中でナンバーツーになるうえに貢献したのは間違いないのです。しかし、そのこのために支払ったコストという問題に、いま我々は直面している。これからは量的な拡大という従来の惰性を追いかけるのではなくて、質的な競争、つまり質の充実ということに、相当大胆に舵を切らないといけないところへ来たのではないか。質ということになると、その中にまたいろんな要素があると思います。従来の工業化と近代化の発展パターンから考えますと、人間も量産が一番低コストですから、義務教育から始まって、なるべく人と違ったことを言わない、考えない、別行動をしない人間を量産するという方向で来たと思うのです。それがこれからの時代にはむしろマイナスに働いてくる。集団とか画一性

を強調するよりも個を重視し、個性が発揮できるという条件をつくつていかなければならないと思います。何か違うものがあると、心理的にも落ち着かないという状態は、はなはだ不健全で、これからの時代には適應できません。違う意見が出ると、なんとなく空気がとげとげしくなるのは、もう二十一世紀にはとても通用しない教授会の体質だと思います。(笑)むしろディベーターを楽しみ、好み、異論を徹底的に議論するようなさわやかな空気ができることが重要だと思います。怠惰や無能が、教授会という集団の画一的・閉鎖的な壁で保護されているようではダメだと思います。

守旧派の妨害を乗り越えて、日本の教育システムを根本から変えないと、政治的なリーダーシップも、産業界のリーダーも、あるいは我々自身が再生産している教育者も研究者も、いまのままであればダメなのではないでしょうか。一種の成功の悲劇みたいなもので、いままで成功したやり方は確かに量産とか、あるいは積極的に外来文化を摂取したということによる成功なんです、逆にその成功がこ

れから命とりになるかもしれないという赤信号がついているのではないか。また、日本独自のシステムや伝統文化についての説明能力、発信能力がないという状況は、小さくなっていく地球の中で、大変危ない状況をつくってしまうことになるのではないかと心配です。

内田 津田梅子が帰国してから一一〇年。いわば津田梅子がアメリカ滞在のときに考えていたことが、いまなお我々の問題です。さらに深刻なのは、国際的に経済的プレゼンスでは突出しているのに対して文化的・学問的なプレゼンスがあまりにも見えないということだと思ふのです。そういうことに一番取り組んでおられた津田塾は、どのようにお考えになっているのでしょうか。

発信能力は姿勢の問題

古木 ます 「個性」についてひとこと。梅子が塾を始めたときの開校の式辞に、「知性と性格の力を備え、自分で思考できる女性を育てる」と明言しています。これは、非常に小規模だったから難を免れたわけで、いまのようにな何千人という大学で、そういうことを目的に掲げていたら、つぶされていただろうと

思います。個性の重視、信念をもつこと、自己表現、を女性に促す大変革的なことを言っていたわけですから。当時「革命的」であったこの目標は、男女を問わず、いまも目指すべきゴールですね。

香山先生も指摘のとおり、日本人の発信能力は大変乏しいですね。先ほどのイギリス人の記事が言わんとしているのも、このことだと思います。発信能力は俗にいう語学力だけではなく、姿勢の問題でもあります。自分の考えを話す、議論をする、といったことは大学のような場でこそ鍛えられるはずですが、これがあまり行われていませんね。発信能力がないと、個人レベルの交渉から、自分たちの文化の紹介、ひいては「国益」まで他人の手に委ねられることになりかねません。

一九九一年末、アメリカで、日本の女流作家の短編集が二冊出ましたが、どちらもアメリカのマイナーな出版社のもので、アメリカ人が選び、訳しています。口頭でも、出版の形でも、日本人が発信している分量は、情けないくらい少ない。そういうことからみても、コミュニケーション能力をつけないと、将来国際的な壁とか民族間の壁がとりはらわれた

ときに、よき世界のシチズンになれないだろうと思います。

最近、PKOで貢献、貢献といっていますが、もつと大きな貢献は平時の、様々なレベルでのコミュニケーションにあるのではないのでしょうか。そういう能力と姿勢を鍛えるということも、二〇〇〇年に向けての努力目標といえますね。

新型の学問の発展、方向

内田 香山先生と古木先生のお話の中に出てくる新型の学問を具体的に学問として発展させる場合、どういう方向の学問で、課題を担っていくとお考えでしょうか。

御前 香山先生がおっしゃった日本文化なり仏教文化なり、東洋や日本についての研究はなされてきたけれども、それを世界に通用するように普遍化し、発信し切れていない、という問題は重要ですね。言語学をコアにした異文化コミュニケーション学のようなものを育てていかなければならないと思います。

内田 単に、言葉ができるというだけでは不十分ですね。結局日本の文化・社会・歴史についての研究がないと話す内容がありません

ん。一番欠けている一つは、地元の研究ですね。私自身は、早稲田に四十年も通っていますけれども、早稲田のある新宿区の研究は、ほとんどありません。日本の数々の大学がそれぞれの地域を研究すれば、これは大変な日本研究になります。学問の全体の組み立てを変えなければいけないのではないのでしょうか。

いままでは、日本よりアメリカやヨーロッパのほうを勉強していました。しかし、そのエネルギーを日本の研究にもっと大きく傾けませんか、発信型の学問はできてこないのではないかと思えます。そういう発信型の学問について、香山先生はどういう構想をおもちでしょうか。

香山 内田先生がいわれたことは、非常に大事だと思います。なぜ目が自分の大学の地元・周辺の地域社会に向かないかということは、これまで議論されていることとかわる本質的な問題だと思うのです。日本語とか日本の文化・歴史というものを絶えず比較をしながら考えていくゆとりがなくて、これまで目が西欧に向いてしまっていた。自分の属する地域社会をしつかり観察していけば、より深く理解できることが理解できないという結構

果になります。

これからはどの国も、輸入したり、模倣したりしてやっていけるような時代ではありませんから、それぞれの現実の観察対象をしつかりと分析し、知識の本来の仕事である生産活動をしないと、流通業だけでは大学はもたないのではないかと思えます。

内田 学問を生産することですね。

大学は学問の生産基地に

香山 生産基地にならなければいけないと思えます。そのためには身近なところでやるべきことはたくさんありますね。臨時教育審議会の委員をやっておりましたときに、日本の大学設置基準というのは、先進国の中で例外的で、思い切った規制を緩和する必要があると言いつけてまいりました。また、知的な発信能力をもった人材を育てるために、専門教育のスタート時期が、日本の大学は遅過ぎると思えます。早くするものは早くしていく。例えば、アメリカの政治を専攻したいと思つて入ってくる学生にとって、最初からアメリカの政治とか日米関係についての専門的な講座を受ける機会があることは重要ですが、他

方で、その学生にとっては、アメリカ文学を学ぶことも必要でしょう。それが文字どおりのリベラルアーツです。ところが、そうではないカリキュラムになっているものだから、それを相当思い切つて変えていく必要があると思えますし、学部、学科編成も時代に合わなくなっている点が多いだろうと思うのです。そのあたりから変えていくことが、当面の二十一世紀に対する責任です。

それから、生産基地になるためには、生産能力のチェックが必要です。研究者としての業績とか、教育が本当に学生に対してきちつと行われているのかというのを自己点検・評価するようなシステムを、ほかから強制されることなくつくりあげていくことです。生産には品質管理が必要なわけです。量が拡大してくる中で、大学は教育機関としても研究機関としても、怠惰に流された面があるのではないかという気がします。

内田 大学は、教授会が中心ですから、どうしても過去を背負っていて、なかなかそこから抜け切れないところがあると思うのです。古い話ですが、一九二九年にシカゴに社会科学研究棟という新しい研究室ができました。

その構想をしたのが当時のシカゴの政治学の中心のメリアムですが、異なった分野の人が隣り合って研究室をもつという仕組みにしました。研究室をタコツボにしないためです。経済学・社会学・政治学・人類学といった、

いろいろな分野の人が隣り合わせて研究室をもつことによって、学問の異花受精を促すことを考えたわけです、新しい学問をつくるために。そういうのがシカゴ大学の二十世紀の中間期の学問の花盛りを招いたかと思えます。津田塾の場合はリベラルアーツということで、割合と裾野を広くとった学問を進めておられますね。

古木 一つ残念なのは、リベラルアーツを学芸学部と訳されていることによる誤解がございいますが、大学院を含めて学生数二五〇〇名の小規模ななかで、時代の要請に応えるよう、内容にはバラエティをつける努力はしてまいりました。私の属する英文学科を例にとりますと、一学年二四〇名の学生のために現在、英米文学、英語学、イギリス文化、アメリカ文化、コミュニケーションの五つのコースを設けております。いずれも「英語」をベースとして展開してきたもので、これから充

実させていかなければならない点もいろいろありますが、このシステムを成り立たせているのは、多分に教員の運用の仕方にあると思います。専任教員は一年生の基礎セミナーから大学院まで担当することで、縦の関連を認識させられますし、文化と文学、語学とコミュニケーションの相互乗り入れて、コース間の横に繋がるディシプリンを重んじるよう心がけています。

ですが、大学の紹介になりますと、学部、学科までしか紹介されませんし、「文学」と名のつく学科は急速に人気を失っていく傾向です。ので残念です。

龍谷大学の試み

御前 その点で、私どもでちよつとおもしろい試みをやっています。深草キャンパスにある、経済・経営・法学部のどの学部の学生でも受講できる学部共通コースを設けているのです。偏差値中心に選択した学生がほとんどで、経済学をやりたくて経済学部に来たわけではないのだから、学生の興味やニーズに沿って、主体的かつ系統的に学修できるようにしようという発想からできたものです。た

たとえば、経済学部の学生がアメリカに興味をもつなら、アメリカ経済論や経済史だけでなく、言語や政治・文学・自然環境、さらに現地実習などの履修も認め、卒業要件単位にみでやっつていいじゃないか、だが経済学部だけではそういうカリキュラムをまかないきれない、ということから始まったのです。

旧大学設置基準の制約下でしたので、思いどおりにいかない面もあったのですが、三学部と一般教育の先生方が共同して、本学で学際コースと位置づけている国際関係コース、また技能コースとして英語および情報科学コース、の三つのコースを開設しました。一九九二年度、初めての卒業生を出しました。まだ一回きりで統計としての信憑性はありませんが、追跡調査では、コース特性が買われて就職できたとみられる形跡が出ています。

内田 大学の入試にも問題があると思います。結局、科目が断片化してしまい、アメリカのことを勉強していても、アメリカ文学を読んだことのある学生は、めったにいません。フランス文学を知らずにフランスの政治を議論する、それではとても深みのあるものの見方、考え方が出てきません。これには科目の

設置にも問題があった。それを今後、大学設置基準の大綱化の中でどう生かせるかということだと思っています。そういうことを前提にして、今度は教育の問題について、論じ合いたいと思います。

香山 デイベートの能力があり、個性をもった人間をつくるためには、量産型ではなくて、多品種、少量生産のシステムでないと無理だと思うのです。しかしここまで高等教育人口が増えていますから、全部を手づくりにするというわけにはいかない。大教室でのマスプロダクションの教育と、それから小人数の教育と、両方うまく結びつけていかないといけないと思います。

もう一つは、大学が国際文化交流のネットワークのセンターになっていくためには、キャンパスが、かなりの程度ミニ国際社会になる必要があるだろうと思うのです。日本の学校全体を見て、どこまでミニ地球になっているかということを考えると、そこがまだ遅れている。

内田 遅れていますね、学生も教員のほうも。

香山 教員のほうもそうですね。大学の授

業は半期制に切り替えていくべきであると私は、ずつといってきたが、日米外交史は、例にとりまして、日米外交史を日本の外交史の専門家が前期に講義する。後期はアメリカの日米外交史の専門家に来ってもらって、彼らの目でネイティブの言語で講義してもらう。そういう研究者の相互乗り入れについてもっと積極的に私学が先頭に立つべきであると思います。

企業はインターネットビル・ブームですね。大学の建物が一番インターネットビルに遠いような状況にあるというのは残念なことです。学生が常時パソコン・ネットワークを利用してきたり、あるいはCNNの受信装置がついたテレビをキャンパスのいろいろなところで見ることができたり、アジア太平洋地域の国々の放送が聞けるように整備していくことも非常に大事だと思います。

ミニ国際社会のキャンパス——津田塾

内田 大学のキャンパス自体をミニ国際社会にという方向を先進的に目指してこられたのは津田塾だと思うのです。そういった背景で、古木先生は、大学が二十一世紀までに準備すべき新しい方向性について、どうお考えでしょうか。

古木 梅子は、プリンマー大学在学中の一八八九―一八九二年にアメリカの友人たちの協力を得て、日本女性のために奨学金を設けましたが、そういう先例も幸いして、塾では学生の留学を促したり、海外で学位を取った教員を採用したり、というようなことをかなり早くから行ってきたと思います。学生や教員の海外との交流が他の大学でも盛んになってきたことは喜ばしいことですが、意外に遅れているのが国内の大学間の交流とか、情報交換だと思うのです。ネットワークを生かした情報の交換や人的交流が、もっとフレキシブルに行われるようになればいいですね。

国際化を叫ぶのに、各大学は村単位というところがあるのは、とても残念です。いざれ望ましい交流ができると考えた場合、逆に大学の個性を尊重するということが、さらに大切になってくると思います。近年ファクションの流行のように、いろいろな大学で「国際」とか、「文化」とかいう名のついた学科が設けられてきましたが、画一化の印象を受けますね。それぞれの大学が伝統に根ざし

た分野を究めていくなかで交流してこそ高度の交流になると思われませんか……。

コミュニティとのかかわり

内田 龍谷大学は滋賀県の瀬田で、コミュニティとの結びつきを基礎にされた大学づくりをされたと、うかがっています。コミュニティとのかかわりをもった大学づくりという点で、どんなことを基礎に置かれたのでしょうか。

御前 滋賀県と大津市の誘致を受けて瀬田キャンパスを開設する際に、地域交流センターをつくってほしいという要望があったんです。どういふものをつくらうかといういろいろ協議した結果、一九九二年四月、REC(龍谷エクステンション・センター)を発足させました。産・官・学の共同研究と教育開放の拠点と位置づけています。一九九三年度中には専用ビルを建設することも決まっています。

やり始めたばかりですが、さっそく成果をあげた一例があります。産・学共同研究で、金属とダイヤモンドをくっつける技術を開発したのです。世界的な評価に値することらしくて、担当した先生方が外国に講演に回った

り、新聞で大きく取り上げられました。

内田 最後に、いい残したこと、おっしゃっておきたいことがありますら。

二十一世紀のキャンパスづくり

香山 キャンパスのことですが、二十一世紀の大学のキャンパスをイメージすると、人の面では外の社会よりはるかに様々な文化・民族を背景にする人たちと出会える場であることが一つ重要な点だと思います。もう一つは、急速に十八歳人口が減少していくという状況の中で、高齢化が進んでいきますから、同学齢層だけが、しかも日本語だけをしゃべって集まっているというのではなく、多様な世代が一つのミニ社会をつくっているというように、積極的にもっていく必要がある。これは単に十八歳人口減少に対応するための経営戦略ということだけではなくて、大学の社会的使命といえますか、責任が生涯学習にまで大きく広がってきたと思うのです。これまでは量的拡大に対応するのに精一杯で、社会的な生涯学習への需要というものは、もっぱら大学外のカルチャースセンターが吸収する形だったわけですが、大学が本格的に乗り出し

ていかなければならない分野だと思っています。環境としてのキャンパスは、現状よりも文化の香りや、風格ある緑のキャンパスをと、学習院ではいっています。

内田 学習院は都内で一番そういう特徴をもっていますね。

香山 伝統文化の遺産を個性として発揮していかなければいけませんから。しかし今後改善していかなければならない点は、緑がただ量的に多いというだけで不十分です。例えば、ある場所には日本庭園的な風雅があるとか、ある場所は国際林の性格をもたせるとか工夫が必要ですね。

また、研究機関としての役割は、いままでよりももっと重要になってくると思います。学習院大学の場合には東洋文化研究所が戦後造られ、これがアジア太平洋地域研究で地道な成果を上げてきています。箸を使っているエリアが経済発展しているといわれている中で、国際政治のレベルでも市場経済のレベルでも東西文化の融合が必要で、そういった研究機関を重視しながら、知的ネットワークを組むことをやらなければいけないのではないかと。

古木 私も生涯教育について感じるところがあります。ときたま五十歳近くの女性が学部学生として入ってきます。息子二人が大学に入ったから今度は自分が、というわけで普通の受験生と同じ試験を受けて入ってくるんです。ケンブリッジには主にそういう中年で大学にはいる、または復学する女性を受け入れるカレッジがあります。

公開講座でも「女性学」などは大教室が埋まるほど人が集まります。また最近、板橋区で日本語教員を養成する講習の受講者を募ったところ、定員の十倍を越す応募者があつたそうですが、これも中年の女性が多かつたそうです。もつと社会とかかわりたい、もつと新しいものを吸収したい、という元気な中年の女性が大変多いんですね。そういう欲求を満たすという意味でも、香山先生がおっしゃったように、大学がそういう人たちを取り入れて多様化・活性化を計り、開かれていくべきでしょうね。

アメリカのキャンパスでは、あらゆる年齢の人が、勤めるかたわら、あるいはある時期仕事をやめて大学に戻るということをしており、出入りが自由で、学生も刺激を受けます。

地域との自然な連帯も生まれる。そういうメリットもありますね。

これからの研究のあり方

御前 今後、二十一世紀の課題や社会的ニーズへの対応を意識した改革が進むことになる、どうしても新しいテーマが追われがちになると思います。そのなかで、古いタイプの研究と言いますか、現在では売れっ子にならない研究を、どのように保護し残していくかということが非常に大切な問題だと思えます。

私自身は、教育プロジェクトとしての研究会を盛んに行い、そういう研究者にも参加していただくことがよいのではないかと考えています。そうすることによって、新奇を追わず一事を深く究めることから得られる洞察力を教育に反映させられるし、他方では自分の研究を、現代の課題や学生のニーズに結びつける目をもってもらえる。そうでない、そういう研究は研究者の好みだけで行ふ世離れしたものとなり、研究者というよりマニアになつてしまふのではないでしょうか。教育を考える場では、社会や学生のニーズを配慮し

ないわけにはいきません。

内田 今日のお話を整理させていただきました。まず、発信型の学問といえますか、創造力を持った学問を目指した大学、それが一つの二十一世紀へ向けての課題。それから、そのためには大学自体が個性的な大学でなければ、つまり、お互いがまねをし合っている、学問がダイナミックに発展しないということですから、そこで、個性ある大学づくりというのが二番目の課題かと思えます。三番目は、いまの変化の中で国際社会にどう対応するかということですけれども、その場合に大学自体が国際社会であるべきだということです。四番目は、最後に議論いただきました地域社会との関係です。単に地域と結びつくというだけではなくて、成熟した地域社会と、最近のはやり言葉ではありますが、共生する大学が特に高齢化との関連で、二十一世紀へ向けての課題ではないかと思いました。

全体として二十一世紀へ向けての大学の宿題がかなり明確になり、また展望が開けてきたのではないかと思います。どうも長時間ありがとうございました。

(一九九二・十一・二十五 私学会館)